

(昭和三十八年度大会講演要旨)

東洋の中世 宮崎市定氏

中世という概念は、もともと西洋における古代世界の没落以後の停滞の時代を意味した。然るにその後、中世史は単なる暗黒の時代でなく、その中に近世を惹起す発展が行われていたことが明かにされ、殊に唯物史観においては、古代の奴隸制よりも一段進んだ農奴制の時代であるとし、その進歩の面が強調されるようになった。併しながら西洋においては、その中世はあらゆる面において古代よりも進んだものとは考えられておらぬように思われる。然るに東洋史家が中世を規定するに当り、動もすれば、その中世は、何れの面においても前代を凌駕する時期としてこれを捉えようとして、その結果、宋代以後を以て中世にあてる議論などが生れる。

併し私は中世とは依然として、古代世界の崩壊、文化の分散、政治的無秩序の時代であるべきものと考ええる。特に著しいのは貨幣経済の衰頹、物々交換の再現である。そしてその根柢に横わるのは深刻な経済上の不景気

であったと思われる。ヨーロッパの中世は既にそのようであったが、これを中国に求むれば、後漢三国以後、唐五代に至る間がそれに相当する。

中国の古代は上古から漢代までで、この間は時に一進一退を繰返しながら、景気は大体向上の一途を辿り、市場は拡大され、生産は促進され、貨幣経済は漸次盛大に赴き、黄金は四方から中国に向って集中した。然るにこの経済的好景気も前漢を頂点として以後下向する。その根本原因は黄金の西方への流出であると思われる。これに伴って、金銭を入手することが困難となり、貨幣経済が衰えると、自給自足を原則とする荘園経済が起り、金銭は有力者の手に死蔵され、それも極度に支出が抑えられて、荘園生産物の布帛や穀物による交換が行われる。併しこの荘園制度は同時に地方の開発を促し、不利益な条件下で已むを得ず進歩した生産力は、やがて宋以後の新しい社会を創り出す原動力となるのである。

昭和三十八年一月二日例会

一月二七日(土)午後一時より

於 京大陳列館第二教室

韓国の考古学 有光 教一氏

——スライド使用——

(発表内容は近く本誌に掲載予定)

漢代の北辺のまもり 永田 英正氏

西暦前二世紀、前漢の英主武帝は、宿敵匈奴を漠北にしりぞける休業をなしたとげたあと、これらの侵入を防衛するために、中国西北北境一帶に多数の成卒を動員し、強力な防衛線を築いたことは、史籍に見えるところである。しかし、その防衛の実体については史籍は多くを語らず、従来ほとんど知ることができなかった。今世紀に入り、内陸の調査の進展にともなって当時の防衛軍の遺址から発見された木簡類は、この問題に対する重要な資料を提供した。とりわけ一九三〇年から三年にかけて西北科学考察団により、エチナ河流域から居延海一帯において発見された居延漢簡は、一万点にのぼるその数、またその内容からいっても、当時の防衛軍の実体を解く貴重な資料といわねばならない。この居延簡の発見とその後の研究によって、当時居延には居延都尉府がおかれて都尉以下の武官を配し、その指揮上には居延・殄北・甲渠・卅井の四候官があり、各候官の下には若干の候と

際とがあつた、また居延より西南方のエチナ

河中流域には別に肩水都尉府がおかれ、そこには居延にみられると同様の組織が展開されていたといふ基本的な配置統属關係が知られるようになった。しかし、防衛軍の最小単位である二百数十の候・際がどの候官に所屬していたかという点になると、従来の研究にもかかわらずはっきりしたことがわからなかつた。幸い一九五九年に「居延漢簡甲編」が出版されて大半の簡の出土地が判明したため、簡の出土地によつて各候・際の所屬を帰納していくことが可能となつた。そこで一例として漢代居延都尉府下の甲渠候官をとりあげ、甲渠候官の遺址である破城子 (Ma-durboljin) 出土の各簡について、書式と内容を分析しながら候・際の所屬を帰納していくと共に、この文書を通じて当時の辺境警備の勤務状態、生活状態などについて紹介した。(永田)

昭和三九年二月例会

二月一日(土)午後一時より

於 陳列館第二教室

「大西洋革命」論

前川貞次郎氏

——世界の動きと歴史の動き——

(発表内容は近く本誌に掲載予定)

マラヤの史蹟

——スライド使用——

日比野丈夫氏

昨年八月から十月にかけて二カ月余り、マラヤを中心に東南アジア各地を廻つたのであるが、目的が華僑の調査であつたから、史蹟とはいつてもほとんど華僑關係のものに限られてゐる。マラッカはポルトガル、オランダ、イギリスと三代にわたる五世紀以上の歴史を有するところで、各時代の史蹟が残つてゐるが、華僑はすでにそれ以前からここに足跡を印してゐた。当地には明代の年号をもつた墓石が二つあるほか、青雲亭という寺は明代の創建で、その亭主はポルトガル領時代から甲必丹に任ぜられ、この寺を事務所として在留華僑の取締りに當つた。ここには清の康熙年代以後の歴代甲必丹の頌徳碑などが残つてゐる。イギリスが開いた最初の町であるペナンでは、マラヤにおける最古の大伯公廟がタンジョン・トコンにあるが、大伯公とは南洋華僑の間に普及する特有の土俗神である。マラヤの都市はほとんどすべて人口の六・七割までを華僑が占めていて、かれらは同郷的または同業的団結の中心として会館をつくり、あるいは同族的団結の象徴として同族祠

をつくる。同族祠の立派なものにはベナンに多く、福建出身の邱氏の龍山堂、林氏の九龍堂などみな建築の華麗さをもつて知られ、前者は同族の守護神として東普の謝安を、後者は祖先神として媽祖をまつてゐる。(日比野)

学界消息

読史会

一月例会

昭和三八年一月九日(土)午後一時

於 楽友会館(以下同じ)

戸主制的「家」と庶民の「家」

庄谷 怜子

二月例会

昭和三八年二月一日(土)午後一時

国学について

泉谷 康夫

一月例会

一月一日(土)午後一時

祭官制成立の意義について

——鉄明・敏達朝を中心として——

上田 正昭

二月例会

二月八日(土)午後一時

釈日本紀の成立について

赤松 俊秀

中国中世史研究会

昭和三八年十一月二日

於 栗友会館

北魏三長制雜攷

於 横山 裕男

十二月二日

於 名古屋大

岡村繁「清談の系譜と意義」合評

於 谷川 道雄

中国中世史の問題点

於 栗友会館

二月一六日

於 吉川 忠夫

抱朴子について

於 吉川 忠夫

東洋史大学院会

一月三一日(金)

於 研究室

『東洋史研究』二二卷一・二号合評会

於 報告者、岡野英二、藤田敬一、吉川忠夫

二月二一日(金)

於 博列館会議室

王維と仏教

於 藤善 真澄

——唐代士大夫崇仏の一面——

於 堀川 哲男

義和團について

於 堀川 哲男

抱朴子の世男

於 吉川 忠夫

法制大学史学会 大会

昭和三八年一〇月二一日(土)

於 法政大学

東国における領主制の成立

於 段木 一行

辺境「在家」の成立とその性格をめぐって

於 村川幸三郎

日本科学史上の一、二の問題

於 大森 実

倉密から化学へ

於 向井 晃

自由民権論者の「天」の思想

赤羽一著「農民の福音」について

於 松尾 章一

明治二十年代の日本主義について

於 松尾 貞子

日本民俗学会 第一五回年会

於 那須 良郎

昭和三八年一〇月一九日(土)〜二一日(月)

於 同志社大学

〈公開講演〉(一九日)

於 同志社大学

日本民俗学における葬制研究の意義

於 五米 重

民間医療の民俗とその基盤

於 長岡 博男

〈研究発表会〉(二〇日)

於 五十嵐典夫

南那のまつりと行事について

於 橘 恭堂

雨乞と大般若経信仰

於 橘 恭堂

祇園御霊会 少将井尼伝承と少将井信仰

於 河原 正彦

讃岐金刀比羅宮の宮座について

於 上井 久義

麓山信仰と修験道

於 鈴木 昭英

尾張古村における一祭祀習俗

於 加藤 三郎

宮古島の巫女の一形態について

於 鎌田 久子

稲荷神について

於 箱山貴太郎

荒神の託宣

於 三浦 秀右

東播磨年頭の忌籠りと神供

於 西谷 勝也

道南のオーシラ神

於 渋谷 道夫

竜王と雨乞

高谷 重夫

島根県下における田中の社について

牛尾三千夫

水辺に童馬を求める話

金関 丈夫

越後における「見るなのざしき」

水沢 謙一

真・禪二宗接触地帯の社会と習俗

桑田 靖之

兵庫県田辺郡のカイト研究

足立 東衛

「うだつ」についての私的考察

丹生谷 章

原田神社の獅子舞

棚橋 利光

民俗芸能の地域差とその基盤

倉田 正邦

マタギ村の社会構造上の特色について

鈴木 満男

能登の「マイカケヨドリ」について

天野 武

大和東山中の子供涅槃について

岩井 宏美

伝承の普遍性と反復性

坪井 洋文

麻以前

後藤 捷一

日本の民俗につながる郷土玩具の生い

田中新次郎

上野 勇

たちとうつりかわり

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

擬声語二つ三つ

於 慶応義塾大学

中米の古代文化の遺跡

西岡 秀雄

— マヤ文化からアステカ文化まで —

日本における甲骨学と殷墟の研究

梅原 末治

史学会 第二一二回大会

昭和三八年一月八日〜一〇日

於東京大学および国立国会図書館

〈公開講演〉(九日)

初期中世についての古典的歴史像の転換

— 国王自由人学説をめぐって —

世良晃志郎

記紀研究の現段階

〈日本史部会〉(一〇日)

視察便に関する二・三の問題 福井 俊彦

十二世紀末葉における遠江国国衙行政権に 八幡 義信

関する一考察 南北朝時代における日蓮宗の発展

— 中山法華経寺を中心に — 中尾 堯

「納銭方」の成立とその機能 桑山 浩然

形成期からみた版本領の性格 塚本 学

御徒組について 南 和男

相給における五人組編成の問題

川村 優

河川交通における近代化過程

川名 登

国会開設期に於ける政府と民党

— 第一回衆議院議員選挙を中心として —

坂野 潤治

近代日本思想史上における

ナシヨナリズムの問題 中瀬 寿一

— その循環性をめぐって —

〈東洋史部会〉(一〇日)

明末水利事業に関する一考察 浜島 敦俊

— 特に常熟県について —

明代陝西の茶馬貿易に就いて 谷 光隆

モンゴル部族社会におけるシャーマン氏 村上 正二

族について 仲雲族の牙帳の所在地について

榎一 雄

中世アナトリアに於ける「ウジ」について

小山皓一郎

宋初の荘園について 丹 喬二

— 成都府・偽節度田欽全の所領を 中心として —

北宋の権法と監当官について 幸 徹

南宋初期の兵の給与と奏槍の武将政策

山内 正博

宋代における絹製品の流通 斯波 義信

北宋末の公田法 周藤 吉之

— 特に方田均税法との関係 —

〈西洋史部会〉(一〇日)

ホプリーテン軍隊のなりたち 安藤 弘

— アテナイを中心に —

アッピアーノス内乱史一の三三

長谷川博隆

— 土地法における家畜の承譜 —

メロヴィングル期の「聖貴族」今野 國雄

叙任権斗争期における PRIMAS について

河井田研朗

ノヴゴロドと侯との関係 石戸谷重郎

— トヴエリ侯ミハイルIIヤロスラ ウィッチの場合

中世ナチュラリズムの問題 堀越 孝一

— 近代以前の記述資料について —

ルターに九五ヶ条テーゼンに関する 沢田 昭夫

新事実とその意義 千葉 治男

初期国王監察官制の成立

— フランス絶対王政直轄行政 支配機構の形成過程 —

一八二九年における英国首都警察

の改革について 安田 栄作

ポピュリズムの経済的諸問題 豊川 良一

アイルランド西部の漁業 古田 哲一

— 人口稠密地帯委員会(C・D・B) (一八九一—一九二三)の活躍に ついて —

予測としてのヨーロッパ統合思想

尾鍋 輝彦

〈東洋史・日本史合同シンポジウム〉 (一〇日)

テーマ「古代東アジアと日本」

漢の国家構造とその理念

唐と北・西方諸国

新羅の朝鮮統一と唐との関係

六・七世紀の日本を中心とする国際関係

中国と東アジア諸国の法

―固有法と継受法―

日本における律令法の継受

討論・議長 竹内理三 西嶋定生

〈史料展示〉国立国会図書館

仏教史学会 第一五回学術大会

昭和三八年一月一日(土)

於 龍谷大学図書館

隋室仏教政策と高僧

王維と仏教

坊長における真宗の下級寺院について

金光明経の仏身観

天台智行高僧伝について

インド仏教史におけるアヴァダーナの位置

日本における滅罪信仰について

- 栗原 朋信
- 舘 雅夫
- 旗田 巍
- 関 晃
- 仁井田 陞
- 石尾 芳久
- 井上光貞
- 前川 隆司
- 藤善 真澄
- 兄玉 謙
- 金岡 秀友
- 堀池 春峰
- 岩本 裕
- 五来 重

昭和三八年一月一六(土) 一七日(日)

〈個別研究発表〉(一六日)

平安期の手工業生産

―とくに官工房の解体過程について―

十四・五世紀の東国の村落と領主

十七・八世紀広島藩における林野所有と村落構造

豪農民権思想および豪農層意識の全面的研究について

三重県朝熊闘争について

共同研究報告(一七日)

「農民問題の歴史的把握」

前近代A

九・十世紀の国家と農民問題

中世社会成立期の農民問題

前近代B

十五・十七世紀の農民問題(I)

近代

日本軍国主義の社会的基盤

神道宗教学会 第十七回学術大会

昭和三八年一月三〇日(土) 二月一日(日)

於 国学院大学

〈公開講演〉(二月三〇日)

欧米の宗教事情

〈共同討議〉(二月三〇日)

「近代化」と神道

井門富二夫・伊藤幹治・戸田義雄

〈研究発表〉(二月一日)

斎部の職掌と祝詞

散祭考

奥能登における三十番神信仰

安津 素彦

沼部 春友

土岐 昌調

園田 健

坪井 洋文

小野 和輝

上田 賢治

倉林 正次

関根文之助

熊野速玉大社祭礼考

キリスト教の日本の展開

篤胤の学と人に於ける徹底と矛盾

国学の継承に関する一問題

静かなる神

明治大嘗祭再興の一考察

―国郡卜定を中心に―

近世神仏分離の教うるもの

―出雲大社を中心として―

宗教と教育との間

近衛家領としての宇佐八幡宮

神道系教団の一考察

村落社会と三山詣

―主として山形県における―

小野 祖教

森 磐根

田中 初夫

岩本 徳一

曾根 研三

小林 健三

龍谷大学史学会 大会

昭和三八年一月七日(土)

於・龍谷大学図書館

楊 鴻 飛

付法藏因縁伝について

網干 善教

飛鳥京城内諸遺跡の調査とその意義

勅修百丈清規に関する研究

大石 守雄

京都洋画壇の先覚者田村宗立について

大橋 乗保

〈講演〉中国仏教の近代化

牧田 諦亮

「史林」投稿規定

「史林」の投稿規定は次の通りです。ふるってご寄稿下さい。

◇資格 本会々員に限る。

◇原稿の長さ

○研究論文 四百字詰五〇枚程度

○研究ノート 四百字詰五〇枚程度

以上には四百字以内の要約と、英文要約

(又は翻訳用要約)添付のこと。

抜刷は二〇部贈呈いたします。

○資料紹介 隨意

○学界動向 四百字詰三〇枚以内

○批判と反省 四百字詰三〇枚以内

○書評 四百字詰二五枚以内

○紹介 四百字詰三枚程度

◇送先 「史林」編集委員会宛

◇なお、「史林」の論文掲載の順序は、いわ

ゆる巻頭論文制を採用せず、日本史・東洋

史・西洋史・地理学・考古学の順、各専攻

の中では時代・地域順となっています。

(研究ノート以下もこれに準じる)

前もってお含みおき下さい。

新入会ご希望の方へ

新入会ご希望の方は、住所(「史林」送先)

氏名・専攻および送本開始希望巻号を明記の

上、会費(年間一、二〇〇円)を添えて直接

当会宛お申込下さい。(但し学校・図書館等

公共機関は、会費後払の便があります。)そ

の際、バックナンバーを併せてお申込下さ

ても結構です。会員の方にはバックナンバ

分の送料は、当会にて負担いたします。な

お、ご送金は、事故防止のためなるべく振替

口座(京都五一五五番史学研究会)をご利用

下さい。

四七巻一号中原「ケンギル都市同盟

について」訂正

一〇三頁上段

一〇行目 「最^{xx}下^{xx}位」を「第^{oo}四^{oo}位」に訂

正。

一五一六行目 「パランスの最もくづれ

ているのがウンマであり」を抹消す。

一六行目 ラガシユの上に「ウンマ」を

入れる。

一〇三頁下段

四行目 ニップールの次に「ウンマ」を

入れる。

五一八行目 「(一)項を抹消す。

九行目 「(三)」を「(二)」に訂正す。

一八行目 「(+26 ta tuku)」を「(+

+26 ta tuku Unag)」に訂正す。

一九六四年三月二日印刷 定価二〇〇円

史林 (第四七巻第二号)

発行所

史学研究会

印刷所

中村印刷株式会社

京都市左京区吉田本町

京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇

理事 長 宮崎 市定
振替 京都五一五五番
印刷所 中村印刷株式会社